
天使の飛び方

Ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の飛び方

【Nコード】

N2602W

【作者名】

Ray

【あらすじ】

天使が空を飛ぶとき、どんな方法で飛ぶのか知ってますか？ 天使の仕事を知っていますか？ 男の子でありたいと願う少女・タツミの前に現れたのは、この世のものとは思えないほど綺麗な「天使」。彼女―天使サールエ―は士官学校の主席で、卒業試験のため降りてきた。その試験問題とは「タツミを悪魔から救うこと」。でもこの試験、余裕だと思っていたサールエにも簡単にはいかないみたいで…！？ そして、サールエにはもう一つの卒業試験があった…。人間タツミと天使サールエ、そして…の14日間。

プロローグ 「天使」、発進

「試験、頑張るのよ。あなたは私の妹だもの、きっと合格できるわ。」

——姉貴は、いつも私を見下してるみたいだ。

「サール工君、君はわしが見てきた中でもとりわけ優秀な生徒だ。卒業試験では必ず良い成績を残してくれるだろう。」

——校長は、私が姉貴に勝てないことを見抜いている。

「もちろん、この私が最後までトップをキープしてみせます！」

——いくら成績が良くても、それじゃ意味ないのに。

でも、絶対トップでこの試験、合格^{パス}してみせる。

ぺたぺたと裸足で石畳の上を歩いてゆく音が響く。洞窟内は灯された幾つもの蝋燭で明るく照らし出されている。

サール工と呼ばれた少女の背には、一對の純白の翼。纏っている薄地の布はまつさらで、一点の穢れもない、純粹無垢を描き出している。

切り揃えられた美しい金髪の前髪を指先で払うと、海のように透き通った深いブルーの瞳が浮かび出た。白い肌はきめ細やかに、すらりと伸びた細い手足は白魚のように。桜の花びらのような唇は引き締められて、真一文字を結んでいる。

——サール工は天使だった。

不意に、彼女は歩みを止める。洞窟の細い通路を進むと、開けた空間に出る。そこには美しい泉が湧いていて、エメラルドに輝く清水はとうとうと白い泡を立てながら、煉瓦で囲まれた小さな丸い池に溜まっていく。その池は洞窟のさらに進んだ先に流れ出しており、蝋燭の淡い温かな炎とは違う、清らかな緑に光り輝く水の路を作っ

ていた。真っ直ぐ伸びた水路の両脇には蠟燭が等間隔で置かれており、なんと幻想的な空間を創り出している。しかし蠟燭と泉の湧水で照らし出された道の遠く先にも、出口の光は見えなかった。

この世の物とは思えぬ、天界とは何処も美しい場所であった。

さわさわと湧き出ずる美しい池のほとりに、サール工は近づいた。水を、確かめるように一掬い。

「視界良好、天気は快晴、風に気流異常なし……っと。」

何かを読み取ったかのように、サール工は呟いた。

「そいじゃま、いきますか。」

彼女はにいつと笑い、指をぱちんと鳴らした。

そこに現れたのは赤い板のようなもの。よく見るとそれは、炎をあしらったデザインのスケートボードだった。

サール工は召喚したボードを池に浮かべた。波立っている水面に揺られて、スケートボードは小さく浮き沈みする。

おもむろに、サール工は水に浮かぶスケートボードに片足を乗せた。驚いたことに、軽いボードは沈まない。

「——よつと！」

サール工はもう片足もボードに乗せた。まるで彼女には体重がないように、ボードは浮力だけで泉に浮いている。そのまま、サール工は右足で水面を軽く蹴って漕ぎ出した。ボードは小さく飛沫を上げてゆつくりと進みだす。ちゃぷちゃぷと池を滑る姿は、天使が水面に立って水遊びをしているようだった。——炎のようなスケートボードさえなければ。

「さて、そろそろ行くか。」

彼女が水路の手前まで来ると、合図のように風が吹いた。小さな蠟燭は炎を揺らし、サール工の長い横髪が頬を撫でた。

水路は穏やかに波打つ池とは違い、激しい流れを作っていた。洞窟の奥からはごうごうと水の流れる恐ろしげな音が響いてくる。

——水路は、天使が飛び立つための「滑走路」だった。

サール工は背中の双翼を、まるで飛行機の主翼のように広げた。その姿は、さながら離陸寸前の白いボーイング。編みこんだ長い髪をまとめるリボンが揺れる。

そして、彼女は再び勢いよく水面を蹴った。ボードもまた、勢いよく飛び出す。ざぶんと音を立てて、天使は流れに乗った。羽を一掻きするとさらにスピードは増して、あっという間に大きく水しぶきを上げて滑走する。両脇の蠟燭の炎は一筋の誘導灯となり、向かい風はきつくなっていく。それでもサール工は一切バランスを崩さず、サーフィンをするようにボードの上で膝を曲げ続けている。

——10秒ほど経っただろうか。泉は遙か後ろに消え去り、今度は出口の光が見えてきた。眩い外の光はどんどん強くなっていく。そして、サール工はさらに身を低く屈めた。

ザアアアアツ——

泉の水は、途切れた洞窟の先から勢いそのままに溢れ出す。崖から飛び出したサール工は、スキージャンプのようにタイミングよく膝を伸ばした。青空はどこまでも広がり、溢れ出た泉の水は、巨大な雲に受け止められ消えていく。

サール工を乗せたスケートボードは、人間界目掛けて落下していく。風に乗れ、気流を外れ、どんどん高度は低くなる。目指す先は

「はらだたつみ原田巽、日本人の女……か。男みたいな名前に外見だよなあ。」

試験内容が発表された日のことを思い出しつつ、サール工は日本へ向かった。

天使は今日、発進した。残り時間は14日……——

第一話 「天使」、襲来

「僕は男の子に生まれたかったよ。」

それは、彼女の口癖だった。

けれども、彼女は女の子だった。可愛い物にはメがないし、友人のふわふわしたスカートに目を輝かせるし、カッコいい先輩に憧れている、普通の女の子だった。

だが彼女はなぜかいつも、髪を短く切り、制服以外のスカートなんて一着も持っていない、活発な「男の子」になりきっていた。

——彼女は理由を答えようとはしなかった。なぜなら、彼女自身その理由を忘れてしまっていたから。

最後のチャイムが鳴ってから数十分。校門からは大勢の生徒ががやがやと溢れ出す。その大半は帰宅部か、または部活を引退した三年生。そして、はらだたつみ原田巽もその一人だった。

彼女の風貌は、まるで「女」を感じさせない。日焼けした肌、短い髪、170cm近い背丈。着ているものこそセーラー服だが、全く似合っていない。彼女が「女装しています。」と言えば、ほぼ全員信じるだろう。嗚呼、彼女が詰襟を着ればどれほど似合うことか！

しかし巽はあくまで女子生徒である。もちろん普通の少女に男子の制服の着用は認められていないので、似合いもしないセーラー服を日々着こなしているのだ。

（やっぱりスカートって暑いなあ。）

もう何度同じこと思ったろうか。中学の膝丈のスカートは、巽にとって邪魔なものでしかなかった。初夏の蒸し暑さを、巽はひたすら我慢して過ごすしかないのだ。

その時、遠くから飛行機のエンジンのような音が聞こえてきた。そんなことは日常茶飯事なので、巽は気にすることもなく通学路を

歩き続ける。しかし今日はいつもと違った。

……巽がふと気付いた。飛行機の音がどんどん大きくなっているような気がするのだ。

（——あれ？　なんかうるさい気が……え！？）

たちまち耳を塞ぐほどの轟音。びりびりと腹の奥が揺さぶられる。

なんとか振り返ると、そこには一つの白い影——近づいてくる。

あれは……ヒト？

「なっ、何！？」

真っ白な影の眩しさに思わず目を覆う。先ほどまで大きく轟いていたエンジン音は、どんどん小さくなっていく。それに反比例して、人影はどんどん近づいてきた。

「アタシが見えるってことは……アンタが原田巽？」

自分の目の前で、白い人影は停まった。そして突然こう言った。

「……へ？」

——否、それはヒトではない。

「……え、羽！？」

真っ白な服に真っ白な翼。見覚えのあるその姿に、巽は何かを思い出しかける。それは、ずっと昔に忘れかけていた忌まわしい——

（僕が天使に……でも天使って……誰が？）

「——って、ぼーっとしてないで答えなさい！」

ずびし。と羽付き人間天使に指される。

「あ……！　は、はい……僕に何か？」

はっとして、巽はとりあえず返事してみた。天使は手に持った紙と巽を、眉根を寄せて見比べている。

「——ふーん。どうやら間違いないらしいな。人間。」

さらりと金髪が揺れる。

「アタシは見ての通り、天使。今日からアンタを救うから、よろしく！」

宙に浮いたままの真っ赤なスケートボードの上で、やたら勝気な天

使は胸を張って笑った。

「——はい？」

もやもやとした心を抱えて、巽は困惑するばかりだった。

第二話 「人間」、邂逅

「ってオイ。聞いてんのか？」

どうにも上の空の巽の顔を、サール工は覗き込んでみた。

「うわ!？」

巽は慌てて飛びのいた。妙な引っかかりは一緒にどこかへ飛んでいつてしまったようだ。

改めて天使を見上げる。きらきらと輝く金系の髪、陶器人形ビスクドールのよ
うに白い肌、深い海のような瞳——彼女は、女も男も魅了する風貌
を具えていた。まるで美しい天使像が、そのまま動き出したよう。

「……アンタ、あんまり驚かねーな。」

天使は不思議そうに首を傾げた。

「それは……。」

「まあどうでもいいか。自己紹介がまだだったね。」

言いかけて、巽はそれを遮られた。

「アタシの名はサール工。西士官学校の最上級生だ。」

サール工という天使は、親指で自らの胸をどんつと指差した。

「し、士官学校……?」

士官学校の意味を理解していない巽を置いてけぼりに、サール工は
どンドン続ける。

「アタシはその卒業試験のために人間界に降りてきたワケ。おわか
り?」

とりあえず巽は頷いた。

「それで、その卒業試験ってのは人間を救うこと。つまりアンタ。」
再び巽を指差すサール工。

「僕を救う……?」

サール工はスケートボードからすんと飛び降りると、指を鳴らし
てそれをどこかへ消し去った。

「そ。アンタは悪魔に呪われてんの。」

「――!!」

「悪魔」という言葉が出た瞬間、巽は無意識にびくつと肩を震わせた。それにサール工は違和感を覚える。

（コイツ、まさか？いや、そんなハズないよな……。）

「何、見かけによらず怖がりなのか？……まあそんなにビビんないで。安心して、このアタシが完璧に卒業試験を突破してやるからさ！」

「そ、そう……。」

胸を張るサール工に、巽は若干気圧され気味である。

その時。路地を曲がってこちらに向かって来る人影が飛び込んだ。

「あ、人が……！ ええと、君、隠れなくていいのかい？」

巽はサール工を庇いながら耳打ちする。

「大丈夫だよ。アタシはアンタ以外の人間には見えないから。」

サール工は巽の唇に人差し指を置いた。

「そうなんだ……。」

路地を曲がってきた主婦のような女性は、道の真ん中で突っ立っている巽に怪訝な眼差しを送って素通りしていった。

「ま、そういうことだから。私のことは呼び捨てでいいよ、タツ

ミ！」

巽はサール工から初めて名前と呼ばれ、少しどきつとした。

「――とゆーわけで、早速アンタん家^ちまで案内してよ。もっと話さなくちゃいけないこともあるしね。」

「え、僕の家……！？ そんな急に言われても――！」

「いいからいいから！ さあ行くぞっ――！」

またも途中で話を遮られ、巽は妙に力強い天使に腕を引っ掴まれ、ずんずん引っ張られていった。

「あの……サール工。僕の家はこっちじゃなくて、あっちなんだけど……。」

申し訳なさそうに反対方向を指差す巽。

「——ベタだよ。」

サールエは不機嫌そうな顔になり、ため息をついてから踵を返した。

第三話 「天使」、来客

「……粗茶です。」

コトリ。盆から手に取り差し出された客用の湯飲み。少し暑くなり始めた初夏には適さないが、とりあえずはお客さんなので……と氣を使った巽なりのもてなしだ。

「こりやどーも、お構いなく。」

などと調子良く言いつつも、この突然やってきた天使サール工は、原田家のソファにどかっとな腰を下ろし、ずそぞと緑茶を啜っている。天使がソファで緑茶を飲んでいる——なんともシュールな光景だ。

サール工と出会ってはや30分。ついさっきまでサール工先導のもと、あつちやこつちを紆余曲折し、徒歩5分のところを倍近く時間をかけて帰ることになってしまった哀れな巽。何度申し訳なさそうに道の間違いを指摘したことか……。天使様に畏れ多いと縮こまる彼女の気持ちなど、たやすく読み取れるだろう。そもそも初対面である。それでも巽は我慢して、なぜか道を知らないのに先に行きたがる天使を精一杯おだててやったのであった。

しかし今、彼女はこの家に最初からいたように、まるで家具の一つにでもなったかのように馴染んでいる。これが天使の持つ神秘の力か？

（なーんちゃって。僕もあつという間に馴染んでるんだけどね……。）

「ところでタツミ。アンタのことだ、天使なんて知らないだろう？」

唐突に、空の湯飲みをテーブルに置いて、サール工は始めた。

「うーん。羽が生えてて頭に輪っかのある天国から来た有難い存在だとは知ってるけど……？」

巽は首をかしげた。

「まあ、合ってるけど間違ってるね。」

「なるほど、確かに頭の輪っかはないよね？」

サール工の頭上をちらりと見る。

「いやいや、そういう意味じゃなくてさ。」

ちつつ、と古臭いしぐさで人差し指を振るサール工に、巽はきよとんとする。

「じゃあ、君の言う天使って一体何なんだい？」

「いいでしょう、説明してあげる。」

待ってましたとばかりに、不敵な笑みを浮かべたサール工はすくつと立ち上がった。

「アタシたち天使はね、人間のためだけに神様から生み出されたんだよ。つまり、人間を救うつてのがアタシたちの仕事ってわけ。」

「……救う？」

思わず口から出た疑問に、サール工はいい質問だとばかりにウインクした。面食らう巽。

「人間はね、悪魔に半分寄生されてるようなモンなの。」

「あ……悪魔もいるの!？」

早速混乱し始めた。サール工はそれを、ゆっくり噛み砕くように続けた。

彼女が、また一瞬、「悪魔」という言葉に震えるのを確認してから。

「そ。悪魔は地獄に住んでる悪いヤツら。人間の寿命を食って生きてんの。」

巽は黙って聞き入る。

「で、人間の寿命を食って自分自身の寿命を延ばす。つまり生きてても何のメリットもない、人類の敵ってトコ。」

「……………」

「サールエは話がノッてきたのか、ソファの周りをうろろろし出した。あいつらは天使がその邪魔をするから、たまに天界へ攻めてくる。……まあこれは後回しでいいか。」

「うろろろして、立ち止まって、うろろろして。サールエは落ち着きがない。」

「で、その悪魔が攻めてくるから、天界にも軍隊がある。——天使のね。」

「ごくんと、巽の喉が鳴った。」

「アタシも軍人志望で、士官学校に入ってる。アタシは今最上級生だから、卒業テストがあってね。それが『アンタを救うこと』ってワケ。……おわかり？」

「……なんとか。」

「少し間をおいて返事をするしか、巽にできることはなかった。」

「ところで、どうして僕のところに？」

「制服の裾をきゅっとつまむ。」

「——そうだね。」

「サールエは少しだけ言いにくそうにした。……ほんの少しだけ。」

「簡単に言えば、アンタは悪魔に……呪われている。」

「……え？」

茜色に染まり行く家の外で、一羽のカラスが鳴いた。

第四話 「人間」、驚愕

「——え……？ 僕が呪われてる？」

自らを指差して、巽は信じられないと言うつぶうに、サール工の言葉を繰り返した。

「イイことを教えてあげる。」

「いいこと？」

サール工は少し深めに息を吸った。そして――

「アンタはね、2週間後に死ぬんだよ。」

先ほどまでうろろしていたサール工は、いつの間にか巽の目の前まで来ていた。そして、彼女の眉間に人差し指を当てた。

「冗談だろ？」

「いいや？」

サール工の本気の瞳を見て、巽は確信した。

「……ぼ、僕が……死ぬ……！？」

普段は冷静な「男の子」を気取っていても、こういう時、巽はやはり「女の子」である。彼女はひどく取り乱した。

「待つてよ！ 天使がいるんだったら悪魔がいるのはわかるさ。」

でも、君の言う悪魔は寿命を食うって……僕の食われた寿命はそんなに沢山だったのか！？

そう、彼女はまだ15歳にもなっていない。

「落ち着いて、タツミ。」

「――！」

サール工は巽に、軽くデコピンをお見舞いした。それでも彼女には十分効果があったようだ。

「あ……。ごめん……。」

しゅんとする巽の頭を、サール工は慈しみを持って撫でてやった。こうして見れば、彼女の乱暴なしゃべり口調など忘れれば、誰もが見とれる場面となつたろう。彼女が乱暴な喋り方さえしなければ……

…。

「安心しなつて。そのためにアタシが来たんだろ？」

サールエはにつこり、と言うには少し下品に、にかつと歯を出して笑った。その白磁の歯さえ大変に美しい。

「悪魔が寿命を延ばすのと、人間を呪うのはワケが違うのさ。」

「……どうということ？」

サールエは巽の前を離れ、再びソファに腰掛けた。

「悪魔にも暗黙のルールがある。むやみやたらと寿命を食べば、すぐに足がつくからね。軍人天使にすぐさま排除される。」

サールエは続ける。

「でも呪うのは、寿命を食ってるわけじゃない。天使に見つかる覚悟で、人間に恨みを抱いたら、その人間を呪い殺しちまうのさ。…

…ああ、ここでいう『恨み』は大体逆恨みなんだけどね。」

「僕、悪魔に恨まれることでもしたかな……？」

自然と、自身を抱くように両手で肩を抱きしめた。

「——さあ、そこらへんはアタシも知らされないからね。ただ、難しい試験になりそうなことだけはわかるかな。」

「君は大丈夫なのかい？」

巽は、（見た目的には）自分とそう変わらないくらいの若い天使を、心配そうに見つめた。

「アンタ、アタシは士官学校でも断トツトップの成績を誇ってるんだ。これくらい難しくなきゃつまんねーだろ？」

天使はまた、ニヤリと得意気に笑った。

「……それは頼もしいよ。」

不思議な魅力を持つ天使に、巽は（半ばムリヤリ）安心させられてしまった。

「ところでさ、タツミ。」

サールエは足を組みかえる。

「何か？」

「アンタ、どうしてそんな男みたいなの？　もしかして、おナベつてやつ？」

冗談めかして、サール工は『試験問題』を受け取った当初からの疑問をぶつけた。見事なまでの直球勝負。

「それは――」

――もう何度同じこと訊かれたろうか？　巽はそのたび、明確に答えられずいた。

「……僕もよくわかんないんだ。ずっと昔に、自分からそう決めたんだと思うけど……。でも、そのキツカケは覚えてない。」

「ふうん……？」

「ただ、すつごく大切なことな気がするんだ。僕は髪の毛の短い男の子じゃなきゃって、女の子に戻ったらダメだって。」

巽の目は、どこか遠くを見つめている。

「……悪いね、変なこと訊いて。」

「ううん。あ、でもおナベじゃないからね？」

巽がくすつと笑うと、サール工も釣られて吹き出した。

第五話 「天使」、真相

それからサール工と巽は、色々な話をした。

「——そういえばサール工。初めて逢ったとき、君は何かに乗っていたよね?」

「ん? ああ、コレのことか。」

そう言うと、サール工は指を鳴らして、あのスケートボードを召喚した。

「そうそう、それって一体……?」

巽はそれを指差して不思議そうな顔をする。

「はーっ。人間サマは天使のこと、何も知らないんだっけ……。」「サール工はわざとらしくため息をつく。

「^{アタシ}天使たちはね、この羽で飛んでるわけじゃないの。じゃあ何で飛ぶかって言うと、このスケートボード。」

「……へっ!?!」

巽はボードをまじまじと見る。

「これで……飛ぶの……?」

「こんなちっさい羽で、人間と同じくらいある^{アタシ}天使たちが飛べるかっての。人間は肝心なことを知らないんだから。」

巽は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。普段の彼女では、滅多にお目にかかれない。

「だからアタシたち火属性の天使は、スケートボードで飛ぶのさ。人間がスケボーを創る、そのずっと昔からね。」

「火属性?」

新たなツツコミどころである。

「ああ、そうか……。人間は知らないんだっけ。ったく、めんどくせーな。」

「聞こえてるよ。」

巽は口を尖らせた。目の前の都合のいい天使は無視をする。

「天使と接触した人間には、情報規制がかけられる。だから、アタシたちの姿形は他人に言えても、名前とか、飛行法とか、属性とかの内容は言えないように口封じされてんの。今度試してみな。」

「へえ……。」

巽は腕を組んだ。確かに、天使がスケートボードで空を飛ぶなど初耳だ。

「で、属性の話。天使には、火、水、風、雷、光、闇の属性がある。……まあ、闇属性は少し特殊なんだけど。」

闇属性の話をさらりと流して、サールエは続ける。

「アタシの属性は火。火は攻撃型。だから軍人に多い属性ね。範囲攻撃が得意ってトコかな。」

「そうなんだ……。他のも教えてよ。」

「しょうがねーな……。水は治癒能力が使える属性。人間^{アンタ}たちの言う『癒しの天使』って感じかな。でも稀に、攻撃もこなせる珍しいヤツもいるの。」

「なるほど。」

巽は興味津々と、瞳を輝かせている。もとより、こんな話は嫌いではない。

「風は防御型。天界の警護やつてる兵士がこれね。でも、応用次第ではかなりの攻撃力もある。雷は攻撃型だけど、火と違って一点集中攻撃に用いる。人間で例えるなら……暗殺稼業のスナイパー。」

「ぶ、物騒だね……。」

「軍隊つてのはそういうところよ。」

サールエは少し真面目な顔をした。

「じゃあ、光と闇は……？」

「光はもう、ホント宝くじで3億当てるくらいに低い確率で産まれるの。だから、『産まれながらの成功者』って呼ばれてる。神の側近とか、伝令係をされるからね。……まあ、それを鼻にかけてるヤツも多いから、あんまり好まれてない。——みんな僻んでんの。」
皮肉るような笑顔を浮かべるサールエに、巽は内心、彼女はサディ

スト気味なんだろうなと考えていた。

「闇のこと、教えてはくれないんだね？」

巽が問うと、ぴくりとサールエの眉が動いた。

（やば、これ禁句なのかな？）

と思った瞬間――

「闇属性は、運び屋ってところかな。」

サールエは意外にも、口を開いた。

「運ぶ？何を？」

「大事なモノをだよ。それだけ。ま、なんせヤツら、どこでどう働いてんのかもよーわからんからね。」

煮え切らない答えに、巽は首を傾げたが、

（もしかして、人間に言ったらいけないのかな。それとも、本当に知らないとか？）

と、これ以上聞かない方が良いと判断した。

（鋭いやツ……。痛いこと訊いてくるんだから。）

だが、実際サールエの心は、あの水路のように波立っていた。

第六話 「天使」、裏側

「——それじゃあ今日からここに住むから、よろしく。」

暗くなるまで話し込んでいた二人の少女のうち、天使の方が唐突に言い出した。

「やっぱり、言うと思ってたよ……。」

人間の方は、少し不満げに言う。

「あれ、嫌そうだな？」

「……僕にもプライバシーがあるからね。」

なかば諦めているとはいえ、まだ同意はしていない。

「心配すんなって！ 悪魔からはプライバシー覗かれないようにするから！」

わざとか本気が、サールエは親指を立てて、彼女のことをスルーする。

「……わかったよ。今日からよろしく、サールエ。」

巽は苦笑いで彼女を迎えた。

深夜2時——

巽も草木も眠る時間だと言うのに、天使はまだ眠っていない。

「午前2時7秒……実施訓練、開始。」

右腕の腕輪を外し、彼女は美しい金髪をポニーテールに結いなおす。普段は編み込んでいるため髪の長さはわからないが、実際は腰より下まで伸びている。そのストレートの髪は編んでいた跡がついてウエーブがかっている。

そして、彼女は黒いフード付のマントを羽織ると、宵闇に隠れるように窓から飛び降りていった。

ひとひらの羽根を残して。

天使も出掛ける、この時間——

「おっはよー！」

朝、目が覚めると窓際には、朝日の後光差す天使。巽はその神々しい姿に目を奪われ、そして――

「……なんだか、君とは初めて逢った感じがしないよ。」

――何かを思い出しかけた。しかしそれは、サールエの言葉に立ち消える。

「はあ？ アタシは逢ったの初めてだと思っけど。」

「……そっか。だよね、気のせいかな。」

巽は欠伸をしてから起き上がった。

「そんなことよりタツミ、学校は？ もうすぐ7時半だけど。」

「あ。」

――女の子の朝は、忙しい。

巽が慌てて家を出た後、彼女の母親も仕事のため家を出た。父親は単身赴任でここにはいない。

がらんとした家の中を、サールエは一部屋一部屋確かめるように見て回った。

「ふーん、結構キレイにしてるじゃん。」

姿は見えないのに部屋のドアが勝手に開くとは、そのうち彼女は幽霊と間違えられそうである。

「……残り時間はあと13日、か……。」

サールエは、天界から持ってきた金色の懐中時計を開く。竜頭を巻くと、懐中時計の端の「14」の数字が「13」になった。

「さて、暇だし悪魔でも捜そっかなー。」

どこか楽しそうに、サールエは懐中時計を仕舞って跪いた。

「実施訓練も兼ねて、探索紋章発動しちゃうぞー。」

床に右手をついて、サールエは目を閉じた。

「……探索紋章・焦土。我ここから焦がす。悪しき者よ、足跡を残
ラ

せ！」

そう言うと、彼女の足元から濃いオレンジ色の波紋が広がった。リビングが、炎色に染まる。

その波紋はサールエの周囲半径2メートル程で留まる。彼女の唱えた言語と同じ——天界語と言うべきか——、この世界にはない文字が円の周囲に描かれ、中央には炎を模った紋章が浮かび上がった。すなわち火属性の紋章。

「……うーん。見つからないなあ。」

サールエは、20秒ほどで探索を諦めた。

「やっぱり、トップとはいえ学生のアタシの力じゃ、ろくに捜せないか……それとも。」

ゆっくり立ち上がる。

「アタシなんかじゃ到底敵わないほど、やり手の悪魔が、ね。」

彼女の考えに同意するように、風が哭いた。

第七話 「悪魔」、夢見

目を開けると、見渡す限りの暗闇が広がっていた。産まれたときから住んでいる、この空間は居心地のいいものだ。

「夢か……。」

彼女の言葉は、人間には理解できない「天界語」で紡ぎ出される。瞬きを数回してから、彼女がゆっくり身を起こすと、ベッドが軋んだ音を立てた。久しく見た夢は、以前自分が交戦した天使と、今自分が呪っている少女の姿を見せていた。

彼女の姿は、黒猫を連想させる。金色の双眸と、黒い髪に黒い服。そして次に連想させるのは、悪魔だ。——彼女の背には蝙蝠の翼が一对、折り畳まれている。

「ハラダツミ……あの時の小娘……。」^{ガキ}

彼女は寝巻きを脱ぎ捨てると、椅子に掛けてあつた服を取った。

「この夢は……。まさか、またあの天使が……？」

滅多に見ない夢は、必ず何かの暗示をしている。今までも、そうだった。

「^{スケーナリア}暗隠紋章・^{スケーラ}夜宵……。^{スケーラ}夜宵よ、^{マレ・タルロ}我を飲み込め。」

彼女は、天使から身を隠す紋章を発動した。紫黒の光線が足下に広がり、四角の中に天界の文字と、翼を模した悪魔の紋章が浮かび上がる。

悪魔とは、その昔天界を追放された者から始まる一族である。彼らは極限の環境「地獄」という、神が罪人のために創造した灼熱の地の底で生きている。だから彼らが操る言語も紋章も、天使たちと共通しているのだ。

もとは天使だった神への叛逆者から始まる系譜は、天使たちの憎しみを培い増やし、今やその怒りの矛先は、無力ながらも神に寵愛

される、生きとし生けるもの——すなわち人間にさえ向いている。そして彼女も、天使を憎み人間を「逆恨み」する一人だった。

たとえば、悪魔の髪。彼らの髪は天使のそれと違って、総じて黒く短い。これは、天使との差別化の一つである。天使が金や銀、果ては青や紫色（もちろん黒髪の天使もいるが、悪魔と違い艶がある）の長い髪を持っているのに対し、悪魔のくすんだ黒い髪は、決して伸びることがない。この神の下した「罰」は受け継がれ、異を呪う女悪魔には、特に顕著な「天使と人間を憎み、異に執着する理由」となっている。

「天使、またあの人間を救いに来たの？ 瀕死になるほど私に齒が立たなかつたくせに。」

悪魔は、彼女の短い黒髪をかきあげる。

「今度こそお前を葬ってやる。今まで殺してきた天使たちのように……！」

悪魔は明かりをつけて、彼女の部屋に壁掛けてある鏡の前に立った。大仰な細工の施された鏡枠にそつと触れると、悪魔を映していた鏡面は銀色に光った。

「今度はこちらから探つてやる。……探索紋章・消灯。我ここから消し去る。グリナム 仇なす者よ、足跡を残せ！」
オルガトラ

彼女が逆探知の紋章を唱えると、鏡にいくつか足跡が映った。それを確認して口角を歪ませると、おもむろに鏡の中へ手をつ込んだ。ぐにやりと波打つ鏡面。

「……ふふふ。尻尾は、掴んだぞ。」

彼女は探っていた手を止め、腕を引き抜いた。手に握られていたのは、白い紐。

「……サールエ、西士官学校生……？ ふん。こんな小娘を送り込んでくるとは、随分と馬鹿にしてるわ。」

情報を書かれた紐を捨てると、たちまちそれは黒い炎で燃え尽き、灰となった。

「でも面白い。……学生ごときがこの私の呪いを解けるか、見せてもらおうじゃない。ご挨拶にでも行かなくちゃ。」
悪魔の女は、そのまま部屋を出て行った。

第八話 「天使」、本題

「ターツミ！ 今日もかつこいいぞ、このやろー！！」
「おわっ！？」

背中に不意打ちをくらう巽。ずっしりと体重が押し掛かり、思わず机に手をつけて支えた。

「……まったく、その挨拶は恥ずかしいからやめてくれって言ったじゃないか。」

咄嗟に手を出したので、衝撃が掌から伝わってくる。……痛い、すごく。

「なーに言ってるの。大、親、友、の私の愛の抱擁じゃない！」
背中にへばりついているのは、彼女の友人である。

「はいはい、おはよう……。」

巽は彼女の手をどかして、荷物を鞆から出す。毎朝のことなので、もう慣れっこだ。

巽は男の子を意識して生活している。それは学校でも同じことだ。当然、彼女は学校でも有名になってくる。後輩たちからは憧れの眼差しを向けられ、女子たちからは、毎年抱えきれないバレンタインチョコレート他プレゼントを貰い、男子からは遊び相手として認識されている。昨年度までいた先輩たちからは、よく可愛がられていた。

申し分なく、彼女は人気者である。

「そんなに僕、変わってるかなあ？」

つい零れた本音を、地獄耳の友人は聞き逃さない。

「なーに言ってるの？ 自分のこと『僕』って呼ぶ女の子は変わってるに決まってるじゃない。」

どうやら彼女の口癖は、「なーに言ってるの」らしい。

「……しょうがないよ。僕は僕なんだから。」
巽はこれから始まる憂鬱な授業に思いを馳せながら、自分に言い聞かせるように言った。

天界、西士官学校校長室――

「校長、彼女を原田様のところへ送ったのは、やはり危険では……。」

そこでは、眼鏡をかけた天使の美女と、椅子に腰掛けた長い白髪と白髭を持つ天使の老人が、何やら深刻そうな話をしている。

「リエルナ君、心配はないよ。君も一度は同意したではないか。」

「ですが――」

「わしは彼女の力を信じておる。君が教師としても、姉としてもサールエ君を心配する気持ちはわかるが……。」

老人は回転椅子を回し、美女に背もたれを向けた。

「彼女自身のコンプレックスに、君も気付いておるう?」

「……。」

美女は沈黙する。

「サールエ君は、君に勝ちたいと願っておる。そのために、彼女がどれほどの努力をしてきたか……ここに居る教師はみな見てきた。無論、君もな。」

老人の表情は窺い知れない。

「ならば君の卒業試験以上の難題を課さねば、彼女の劣等感は拭いきれないだろう。」

「……しかし今回はかりは、サールエの力では……。」

姉は、本気で妹のことを心配している。

「君は優秀だ。数百年に一度の天才とも呼ばれよう。だからサールエ君は君に挑むためにここに入学した。わかるね?」

彼女が頷いたのを「空気」で感じ取った老人は続ける。

「……本当の卒業試験は、人間を救うだけでなく、君への劣等感を拭い去ることだ……。なあに、心配はない。彼女が卒業試験を合格

するまでは、この生徒。護られる立場にある。」

老人は優しく笑う。

「……わかりました校長。でもいざというときは……。」

「わかっておる。」

老人が椅子越しに手を振るのを確認すると、美女は失礼しますと言
って退室した。

「サール工君、君は優秀だ……。必ずや、この試験を合格でき
ると、信じておるよ。」

老人は、いつか生徒にかけた言葉を思い出しながら呟く。

第九話 「天使」、睨合

「ただいまーっと……ん？」

勢いよく部屋のドアを開けた巽は、いつもと違うモノを発見した。

「おかえり、タツミ。悪いけど今取り込み中なんだよね。」

「――へ？ ……どういう……っ！？」

巽がゆつくりと、サール工から視線をずらしていく。そこにいたのは……――

「ふふ……。久しぶりね、タツミちゃん。」

金の瞳と漆黒の翼。滲み出るのは悪しき心。

「――あくま……？」

一歩後退りする。迫り来る狂気と邪心。

「あら、私のこと憶えてない？ そう。貴女あの時まだ小さかったものねえ。」

悪魔の睥睨^{へいげい}に打ち勝つことなど不可能だ。人間ならなおさらのこと……。

サール工が、悪魔の威圧を遮った。

「……憶えてない？ お前、昔タツミに逢ったことあるのか？」

サール工は、悪魔から視線を外さない。

バチイ！

目の前のクッションを、黒い稲妻が焦がした。

「『お前』だなんて失礼な言い草ね。今時の学生さんは、言葉遣いも弁えてないのかしら？」

悪魔は微笑で、サール工を威嚇した。彼女の指先には、煙が立ち昇っている。

「……私はサール工。あなたは？」

「ザンヴィアよ、仕官候補のお嬢さん。確か、エリート部隊の“月”への入隊が決まってるのよねえ？」

「何故それを!？」

サールエは焦ったように声を荒げる。初めて「本物の悪魔」と遭遇し、尚且つ全てを見透かされていることに動揺している。見下すような視線は姉の眼差しを思い出させ、見透かすような視線は校長の言葉を思い出させる……。

どんなに優秀でも、彼女はまだ学生だ。

「『消灯』よ。ご存じない？ 士官学校の主席さん。」
ザンヴィア

悪魔は、何でもお見通しと言うふうにサールエを見下ろす格好で浮遊している。悪魔は天使と違い、自らの翼で飛行ができる。

「……ヴァイ……逆探知の紋章!」

サールエは、顔にしまったと書いた。自らの場所を悪魔に知らしめてしまったのだ。

「ふふふ……。まだまだお子様ね。でも安心して、今日は挨拶に來ただけよ……。」

巽はその場にへたり込んでしまっていた。神聖と魔性の睨み合いの場で、ただただ固まることしかできなかった。あの日のように……

（あの日って、いつだっけ？）

心臓が、鳴り止まない……。

「忠告しておくわ。貴女のような小娘は私に勝てない。巽は諦めて、貴女もここから出て行きなさい。」
その娘

先ほどの、愉悦を含んだ物言いとは打って変わり、ザンヴィアは冷たく言い放つ。

「……どうしてタツミを狙う？」

サールエもまた、明らかに敵意の籠った視線を突き刺す。もっとも、

ザンヴィアは何も気にしていないが。

「さあね。その小娘にでも訊いてみれば？　それじゃあ失礼するわ。」

ザンヴィアは、窓の縁に足を掛ける。

「あつ……待て！」

サールエは悪魔を追う。しかし、すぐに足が出なかった。

（恐れてる？　このアタシが……！？）

サールエが窓から身を乗り出す頃には、とうに彼女は窓から飛び立ち、消えていた。羽音がどこかでこだました……。

「……サールエ、今のが悪魔？」

巽の声は震えている。悪魔が去った今、ようやく声を出すことができた。

彼女は非力な「人間の女の子」だ。

「ザンヴィアか……かなりの手練みたい。」

サールエは窓の外を見つめたまま、こちらを向かない。

「……タツミ、今の女に見覚えは？」

「わからない……。憶えてないだけ、かも。」

巽は蹲^{うつすくま}った。鼓動はまだ大きく早く、胸の苦しみや痛みを閉じ込め続けている。

「——そうか。」

サールエも巽も、それ以上何も言わなかった。

第十話 「天使」、複合

「この世にふたりと天才はいらないわ。それは私が神より授かった才能で、あなたの努力じゃ追いつけないものよ。」

今も姉の言葉が、頭の中を埋め尽くす。

アタシは、弱い。あの悪魔には勝てないだろう。

姉貴は、強い。姉貴は天才だから。

だからアタシは、姉貴に見下されてると思うことしかできない。強いくせに優しい姉貴が、なおさら憎い。

あの一件以来、サール工はどうにも元気が無い。表面上は隠そうとしているのだろうが、彼女は嘘が下手だった。巽の洞察眼は、決して鈍くはない。

「最近さ、友達が元氣ないんだよ。」

休み時間に、巽はクラスメイトに相談を持ちかけた。

「友達って？ やよい？ はるか？ それとも……」

「えっ。ああ、違うんだ。……その、他校の子だよ。」

友人の詮索に、巽は慌ててサール工の存在をごまかす。まさか天使だとは言えまい。

「ふーん、私に隠れて浮気してるの？」

この冗談めかす友人を巽は嫌いではなかった。

「もう、浮気とか言うのはやめてよ。僕も君も女の子でしょ！」

彼女たちの笑い声は、教室内のざわめきに溶け込んだ。

「あはは。だって巽、そこの男子より全然カッコいいもん。」

でも、そっかー、元氣ないのかー。」

普段は冗談を言うことや人をからかうことが好きな彼女だが、相談には真剣に乗ってくれる。巽の人選はなかなかのものである。

「そうだなあ。やっぱり元気ないときは、おいしいものでしょ！」
彼女は、閃いた！　と言わんばかりに目を輝かせている。

「それは君が食べることが好きなだけでしょ……。」

普段の彼女の、細い身体からは想像もつかないほどの食べっぷりを
思い出して、巽は半分呆れる。

「何言ってるの！　食べることにこれすなわち幸せ！　そうでしょ？」

彼女はこと食べることに關しては、やたら厳しい。

「……わかったよ。じゃあ試してみる、ありがとう。」

だが、呆れつつも巽は彼女の食べる姿を見るのが好きだった。何故
なら彼女の言うとおり、本当に幸せそうな顔をするからだ。

「元気、出してくれるといいんだけどな。——あ。そういえば肝
心なこと訊いてないや……。」

巽は食材を抱えて、帰り道を歩む。

「サールエ、ただいま！」

「おかえり、タツミ。」

巽の帰りを、サールエが笑顔で出迎えてくれた。その笑顔はどこか
ぎこちない。そんな彼女を見て、巽は切り出した。

「ねえ、君は人間の食べ物は何を食われるの？　食事をしてい
るところを見たことないんだけど……。」

巽はスーパ―の袋の中身を冷蔵庫に入れながら訊く。

「……まあ、天使は基本的に飲まず食わずだからね。でも食べ
れないこともないよ。」

サールエは、どこから持ってきたのか分厚い洋書を読んでいる。

「そうなんだ。たとえば？」

「天使は人間界に降りたときに、たまに食べ物にハマったりす
んの。そういえばアタシの姉貴も色々人間界から取り寄せてたなあ……。」

冷蔵庫がパタンと閉まる。

「アネキ？　へえ、お姉さんがいるんだ。」

「……まーね。」

サールエの声の調子は、変わらない。

「じゃあさ、僕の作ったもの、食べてくれる？」

巽はいつの間にかエプロンを着て、ボールを小脇に抱えていた。それを見てぽかんと口を開けるサールエ。ややあつて、彼女は目を細めた。

「……それなら食べさせてくれよ。期待してるからな。」

サールエは洋書を閉じて笑った。今度こそは、本当の笑顔。

第十一話 「人間」、料理

巽はなにやらキッチンにある調理器具をがしゃがしゃ取り出した。お玉、泡立て器、しぼり袋と口金、ホットプレートなど……。

「ってタツミ。一体何作ってくれんの？」

サール工は彼女の後姿をしげしげと眺めながら、首を傾げた。

「んー……。クレープだよ。」

巽は振り返ってそう言った。その瞬間――

サール工は固まっていた。

「……ちょ、ちよつと？ 大丈夫かい？」

巽は慌ててサール工の目の前で手をひらひら振った。5秒間停止していたサール工は、はっとしたように巽を見上げた。

「クレープ……か。よく姉貴に食わされたよ……。」

サール工は唐突に、辛酸を舐め続けた薄幸の美少女よろしく語りだした。

僕、何かまずいこと言ったかな……？

得体の知れぬ何かのスイッチを押してしまったことを巽はかなり後悔した。

「アレは姉貴がまだ士官学校を卒業したばかりの頃だった……。サール工は青ざめた顔で言葉をしぼり出す。」

「ねえサール工。“クレープ”って知ってる？」

「クレープ？ 何それ。」

楽しそうな顔をした姉のリエルナが、サール工の顔を覗き込んで言った。後ろ手に何かを隠し持っているのは、まだ士官学校に入学していないサール工にすらわかつている。

「じゃっじゃーん！ お姉ちゃんサールエに食べて欲しくて、作っちゃった。」

リエルナはよくぞ訊いてくれたといわんばかりに、隠し持っていたクレープをすばやくサールエに差し出した。

そこには――

「クレープの中身、なんだったと思う？ ふふ。アタシは今でも忘れない、あの味を――」

サールエの眼差しは、だんだんと虚ろなものになっていった。

「……なに、これ。」

サールエはクレープを見たことも聞いた事もなかったが、それはあまりにも、あんまりだった。

「クレープはね、薄焼きにした生地好きなものを巻いて食べるのよ！」

リエルナの眼はきらきらと輝いていた。サールエの眼は濁っている。

「……おねーちゃんの好きなものって？」

姉はにこにこ顔で指を折りながらクレープの中身を数えた。

「いちご、マシュマロ、はんぺん、いそべ揚げ……おまけに刺身……。」

サールエの声が垂直落下並みのスピードで低くなっていく。冷や汗が巽の輪郭をなぞるように流れた。

最初の二つはまだいい。だが、なぜそのチョイス？

巽は絶句した。

「ふふふふ……。あの頃のアタシは姉貴を信じてたんだよ、おいしって、その言葉をね……。」

あまりにもサールエが天使らしからぬ様子でいるので、巽は手に持っていた生地を混ぜ合わせていたボールをうっかり落としそうになってしまった。あぶないあぶない……。

十数分間、沈黙が続いた。この家中で音を発しているものといえ
ば、時計の針とホットプレートでクレープ生地がプツプツいつてい
るくらいだ。

「……まっ、まあさ。騙されたと思って食べてみてよ。」

いたたまれなくなった巽であるが、作ってしまったものは仕方ない。
サールエのトラウマをほじくり出そうが、彼女の誤解を解くことか
ら始めようと思ったのだ。

しかしサールエは動かない。

「……えっと……。あ。じゃあ、僕が先に食べるから、君はその後
で食べてみてよ。」

自ら作ったものを毒見するほどむなしいこともない。1歳馬に初め
て鞍を載せるように、怖くないよアピールをしながら巽はクレープ
を一口かじった。

我ながら上手くいったと思う。

クレープなんてまず作ることはないが、妙に綺麗にクレープ生地
が焼けたり、ほどよくホイップクリームを搾り出せたりと、何かと
今日は成功が多い。これは神様の思し召しか何かなのかな、と巽は
考えた。

無論、気のせいであるが。

サールエをちらりと見ると、彼女は食い入るように自分の手元を
見ている。本当に怖かったんだなあ、と改めて驚いた。天使様に怖
いものがあるのかと。

じいっとクレープを見ていたサールエが、おもむろにそれを手に

取った。そして無言のまま、豪快にかぶりつく。

「……………んまい。」

口元にクリームを引っ付けて、サールエは微笑んだ。

「成功した。」

巽は小さく、呟いた。

ボール一杯のクレープ生地は、その日のうちに空になった。

「僕、なんか気持ち悪いから、晩御飯はいらないよ……………」

「ええ！？ 珍しいわね、ご飯いらないなんて…………。お父さん、明

日は台風よ！」

食べすぎで寝込む巽を見た母は、腰を抜かしたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2602w/>

天使の飛び方

2011年12月20日22時55分発行